

文化財を訪ねて

―見てある記―

『道しるべ』は、やさしい心の
おもてなし②

2月号に続き、桶川市の文化財として指定された道しるべをご紹介します。

「天神道の道しるべ」



り込まれ、加納天神方向を指さしている手が浮き彫りになっています。丸みを帯びた袂の袖口から出ているのは、少女の様な柔らかくふっくらした指先です。この指先に従い、示されている距離をたどれば、まもなく天神様に辿り着くのです。加納天満宮は天神様と親しまれ、境内には諸病によく効くという薬湯がありましたから、病を得た旅人も、疲れ切った体を引きずるように歩く旅人もいたでしょう。それらの人々にとって、なんと優しい道しるべだったことでしょうか。ホッとする旅人の顔が浮かぶような気がします。

また、漢斎英泉の浮世絵「岐阻街道六十九次 桶川宿（中略）景」では旅人が農婦に

加納天神への道を探ねているさまが描かれていると言われています。これを見ると、いかに加納天神が多くの参詣者を迎えていたか、篤い信仰の対象になっていたかがわかります。

（ここまで前回（2月号）と合わせて風情の異なる三つの道しるべをご紹介します。歩くことが少なくなった現代、まして道が変わり、置かれていた位置が変わった道しるべに本来の意味を持たせるのは無理があるかもしれません。しかし、草むす道を、足を頼りにひた辿る当時の旅人にとって、たとえ小さい道しるべであっても、それに出会う事はどんなに大きな喜びだった事でしょうか。それは単に旅程上の問題だけでなく、心の平安を生む安堵のしるべでもあったのです。

道しるべというものを改めて考えてみると、何よりも大切なことは、それらの道しるべは、建てた近在の人々自らには、決して必要なものでなかったことです。見知らぬ土地を旅する人々の不安や困難を想い、旅の安全を願い、便宜を図ろうとした、地場の人々のやさしい心と想像力が成さしたものではなかつたでしょうか。

道しるべは旅ゆく人への何よりの「おもてなし」だったのです。

「べに花ふるさと館」前の道と川越栗橋線が接する辺りにこの道しるべがあります。嘉永二年（一八四九）八月に下加納村の名主本木勘太夫と桶川宿八百屋宗吉によって建てられました。正面には「天神道」、右側面には「天神十一丁十一間」の文字が彫

